

2019年(令和元年)7月18日(木曜日)

# 日本に19件

日本の世界文化遺産は一九九三年に法隆寺周辺の仏教建造物(奈良県)と姫路城(兵庫県)の二件が登録されたのに始まり十九件あるが、課題を抱えているところも少なくない。

「世界遺産登録されたら夢のように潤うと、経済的メリットばかりが強調されて、もつけることばかり考えている。遺産の文化性が何なのかということが、忘れ去られていないか」

「この問題提起するのは都留文科大の渡辺豊博特任教授(富士山学)。渡辺氏は一九九〇年代から富士山の世界遺産登録運動にかかわってきた。環境問題で自然遺産としての登録にたまずくと、富士講などの文化遺産登録に目標を変えた。」

## 肝心の文化性 伝わっているか

二〇一三年に登録が実現すると毎年三十万人が押し寄せるようになった。多くは登山客で三割は訪日外国人だ。「いったい富士講はどつなつたのか。信仰や芸術性、歴史は理解されてない。富士山は泣いている。世界遺産登録によって殺されたようなもの」と嘆く。

だが、登山者も「ピークは過ぎた」という。「今、地元財界などから提案されているのは富士山の登山電車だ。さらに高速ロープウェイなんて言っている人もいる。劇薬は副作用もきつい」と警鐘を鳴らす。

法隆寺や姫路城など、いかにも日本的で著名な世界



遺産と比べ、知名度の低さが否めない島根県の石見银山遺跡は観光客の減少に直面している。

島根県文化財課世界遺産室によると、〇七年の登録

### 富士山信仰 理解されず

### 石見銀山 観光客が減少

2016年、「山の日」を前に、富士山頂を目指して出発する登山者でにぎわう富士宮口五合目。最近では登山者数も伸び悩んでいる=静岡県富士宮市で

後、〇八年には年間八十一万人余に達した。だが、そこから徐々に減り、現在は登録前の同三十万人台に戻った。予備知識なしで行くと、環境に配慮した生産方式などの価値が分かりにくく、「がっかり観光地」と揶揄する声もある。同室企画員の伊藤徳広さんは「こういう時こそ人数に振り回されず、地域の宝として銀山の価値をどう伝えるか、地元の人が核になって追求している。交通不便で来ていただくのは大変だが、来ていただけたら満足してもらえらはず」と話す。

近年は韓国人の訪問が増えている。政治的には冷えきった日韓関係だが、「銀山の二つの街道が韓国で紹介されたようです。韓国人グループが歩いていたりするとうれしい」(伊藤さん)。(佐藤直子)